

陰性感情を超えて 精神症状に潜む身体疾患

田宗秀隆

順天堂大学医学部精神医学講座

山中克郎先生や上條吉人先生に初めてお会いしたのは医学生の頃でした。“こんな先生のようにになりたい”と思い、多摩総合医療センターでの初期研修時代には、山中先生の『UCSF に学ぶ できる内科医への近道』や『外来を愉しむ 攻める問診』をボロボロになるまで読み込み、上條先生の『臨床中毒学』を携えて救命救急センターに常駐しました。精神科に進みながらも、リエゾンを専門としたのは必然だったかもしれません。

月日が流れ、そんな憧れの山中先生から共同編集のお誘いを受け、「私がこの先生から学びたい」という執筆者の皆さまをご紹介させていただきました。実際原稿を拝見し、それぞれの先生から学べることは想像以上に多く、役得でした！

No health without mental health (Lancet, 2007) であり、かつ No mental health without physical health (Lancet Psychiatry, 2023) です。精神症状に出合ったときに、併存するあるいは背景に潜む身体疾患をケアできることは、総合診療医の大きな強みではないでしょうか。

現代は YouTube などの動画や ChatGPT などの生成 AI で効率的に情報収集することができ、それらを使いこなすスキルももちろん重要です。その一方で、丁寧に推敲された原稿を一文一文読み込むことで病態理解の解像度を高め、臨床実践に反映し続けることもまた大切だと思います。読者の先生方が、精神症状を伴う身体疾患の患者さんをさらにたくさん診療・支援してくださる一助になれば幸いです。

G

山中克郎

諏訪中央病院総合診療科 / 救急・集中治療科



救急車やウォークインで来院される数多くの患者さんを受け入れる忙しい救急室に勤務していると、精神疾患を疑う患者さんが来院したときに陰性感情が働いてしまうことがあります。「面倒だなあ。早く救急室から出て行ってほしい」という感情です。正直に申し上げると、私も何度かこのような状況に陥りました。

しかしながら、このような時こそ要注意なのです。急性あるいは亜急性に発症した精神症状は、その背後に重大な内科疾患が潜んでいることがよくあります。合理的な理由をつけて、無理に帰宅させてしまった患者がその後に急変することがあります。

今回の特集では、そのような精神疾患と間違いやすい精神症状を呈した内科疾患について、臨床経験が豊富な方々に執筆していただきました。救急医、精神科医、産婦人科医、小児科医、内科医の立場からはどのようにこれらの疾患が描写されるのでしょうか。こんな症例もあるのかと知っていれば、心に余裕ができます。忙しい救急室でも落ち着いて鑑別診断を考え、診断に必要な検査を慎重にオーダーすることが可能です。

今回の特集では、そのような精神疾患と間違いやすい精神症状を呈した内科疾患について、臨床経験が豊富な方々に執筆していただきました。救急医、精神科医、産婦人科医、小児科医、内科医の立場からはどのようにこれらの疾患が描写されるのでしょうか。こんな症例もあるのかと知っていれば、心に余裕ができます。忙しい救急室でも落ち着いて鑑別診断を考え、診断に必要な検査を慎重にオーダーすることが可能です。

本特集の企画立案に際しては総合診療に関心がある精神科医、田宗秀隆先生に相談しました。田宗先生は学生向け勉強会からずっと交流がある私のメンティーです。豊富な交流関係から、たくさん執筆者を紹介してくれました。メンティーは成長とともに、メンターも指導してくれるようになります。それは医学教育の最も素晴らしい宝物の1つです。

G